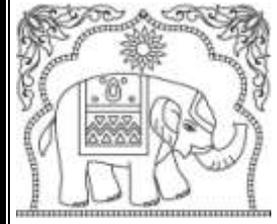


まいとりい मैत्री

No. 6 平成21年度 秋号 - 2009. 10. 7 -
東洋大学仏教青年会・東洋大学仏教会発行機関誌



< मैत्री > :maitrī (マイトリー) とは、慈しみ、友情、思いやりを意味する古代インドのサンスクリット語です。

仏教では慈 (いつくしみ)・悲 (あわれみ)・喜 (よろこび)・捨 (とらわれない心) という四つの広大な利他の心 (四無量心) の一つです。

菊の香りもすがすがしいさわやかな季節になってまいりました。皆様いかがお過ごしでしょうか。大学では新たな授業が始まり、久しぶりに懐かしい友たちと顔を合わせることが出来ました。秋に向かい、我々仏教青年会の活動を更に充実させていきたいと思っています。皆様どうぞ今後ともよろしくお願い致します。

藤井明 (編集責任)

～ 活動報告 ～

《沼田先生と登る高尾山》

7月5日『沼田先生と登る高尾山』に参加した。前日まで雨もような日が多く、天気心配されたが当日はくもりだった。

待ち合わせ場所の京王線高尾山口駅は、大勢の人がいて混雑していた。高尾山は人気があるようだ。登るにはいくつものコースがあり、ケーブルカーで行けば簡単に登れるが、若くて元気な沼田先生引率のもと、もちろん歩いて登った。

くもりとはいえ、山道を歩いていると冷房に慣れた体にびっくりする程の汗が出る。歩く右側の下方から聞こえる沢の水音が涼しげだ。目に入るのは葉の緑だけ。こんな道をしばらく進んで行くと、長く続く階段があった。これは少しきつい。「お先に。」と若い大川さんが追い越していく。いつのまにか最後尾だ。頂上に着くとみんなが待っていた。

頂上では持っていったおにぎりを食べる。歩いた後のソフトクリームがおいしかった。晴れていれば富士山が見えると沼田先生が説明して下さったが、この日は見えなかった。

帰り道は下って高尾山薬王院に立寄る。縁の中にあでやかな朱塗りの柱が印象的だ。ここは成田山、川崎大師と並んで真言宗関東三山のひとつのこと。また、高尾山には天狗にまつわる伝説が多らしく、参道のあちこちに天狗の銅像などがあった。

下山したところのお店で、それぞれおそばやみそ田楽を食べ、ビールを飲んだ。その後みんなで一緒に新宿まで戻り解散となった。いっぱい歩いて、いっぱい汗をかいて、おいしいビールを飲んで、とても気持ちの良い一日だった。

(インド哲学科4年 田中節子)

【目次】

活動報告	……1	コラム「日本文化と仏教」⑤	……5
夏季研修旅行報告	……2	書籍、イベント紹介	……7
コラム「仏教人物列伝」⑤	……4	今後の活動予定	……9

《高尾山での活動風景》

《夏期合宿》

日光研修を振り返って（実施日：2009年9月17-18日 場所：栃木県日光市）

日光は男体山が標高 2,486m、中禅寺湖から湯元までの奥日光が標高 1,250m～1,500m、東照宮周辺が標高 600m に位置し、水と空気の澄んだ緑地である。勝道上人が 766 年に四本竜寺を建立して以来、信仰の地として、今日まで神社仏閣を中心に栄えてきた。

本年度の研修旅行は、仏教と神道の混在し融合するこの日光の大自然に身を置くことで、「神仏」という日本の宗教的有り様を少しでも感じることができればと考え、仏教会・仏青会員 11 人で実施しました。私は幹事を務めましたので、以下、幹事の視点を交えつつ報告させていただきます。

初日午前 10 時、東武日光駅に到着。天候は快晴。渡辺先生が車で来て下さり、スケジュール通りに進まない際の不安が解消する。輪王寺と東照宮の参拝では日光殿堂案内協同組合の小平さんに説明をお願いした。まず勝道上人の足跡と日光の大まかな歴史の説明を受け、輪王寺へ。全長 8m の仏像と、それを収める木造で重要文化財のお堂に皆が感銘を受ける。お祀りされているのは千手観音・阿弥陀如来・馬頭観音で、日光男体山・太郎山・女峰山の神々の本地仏であるという。護摩壇があったが、防災のために現在では護摩を行っていないようだ。（その代わりに三仏堂の裏手に護摩堂がある）。

続く東照宮は修学旅行の小学生で満ち溢れていた。他所に比して東照宮に人が集中するのは、建造物に見られるきらびやかな装飾故であろうか。私も思わずカメラを向けてしまう。これは東照大権現たる徳川家康を敬愛する家光が、「寛永の大造営」として造らせたものだという。次の仕事の迫っている小平さんとお別れした後、深閑とした細い石畳を進み、家康の眠る奥社へと辿り着いた。

二荒山神社へは杉の大木が立ち並ぶ路を行く。片隅には観光用の馬車が待機している。参加者の一人が馬のにおいに故郷を思うと言い出し、心が暖まる。拝殿では巫女さんから説明を受けた。二荒山大神の他、大己貴命（おおなむちのみこと）・田心姫命（たごりひめのみこと）・味耜高彥根命（あじすきたかひこねのみこと）という日光の氏神がお祀りされ、男体山頂の奥宮と中禅寺湖畔の中宮祠と併せて二荒山神社だという。大木に囲まれた境内には厳かな空気が流れている。

家光廟の輪王寺大猷院をお参りし、遅めの昼食を採った後、バスにて湯元温泉へ向かう。湯元は硫黄が充満している。宿舎である紫雲荘で女将さんの歓迎を受けた。石油ストーブのにおいが残っており、館内を暖めて待っていてくれたようだ。まだ夕刻だったので、温泉の湧き出る泉源や湯ノ湖畔を散策する。日の沈むに従い、肌寒さが強くなる。宿舎に戻り、温泉と食事、懇親会を楽しみ就寝となった。

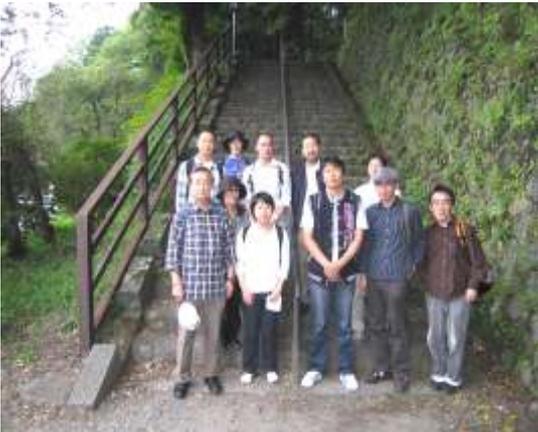
二日目午前 8 時、宿舎を出発し湯滝へ。天候は快晴。標高があるためか空に手が届きそうだ。湯滝からは、川沿いに竜頭の滝までの戦場ヶ原ハイキングコースを歩く。およそ三時間、景観を満喫しながら湿原を散策した。小学生達が歩くリズムに合わせて歌っている。元気な声もたくさんあって、聞いていて心地よい。戦場ヶ原とは、赤城山と二荒山（男体山）の神々が、それぞれ大ムカデ（赤城山）と大蛇（二荒山）に化けて戦ったという神話の舞台だが、正確に説明できなかったことを後悔した。

竜頭の滝に到着し、出発前に紫雲荘で用意してもらったおにぎりを頬張る。滝下の小さなお堂には竜頭観音という竜に乗った観音さまが祀られており、縁日のために開帳されていた。散策にどれだけ時間がかかるかと心配していたが、スケジュール通りバスで立木観音へ。

立木観音とは輪王寺別院の中禅寺の呼称で、重要文化財の本尊十一面観音が立木を彫って作られたことによるという。中禅寺湖を一望できる景観や門前の町並みに趣がある。内モンゴルの留学生オーダムくんの撞く鐘が響く。職員さんの説明にそつがなく、もう少し参拝する余裕を与えて欲しかった。

最後に二荒山神社中宮祠。中宮祠は中禅寺湖畔の男体山麓にあり、男体山をご神体とする。我々の他に参拝者はない。毎年行われる男体山登拝の儀式では般若心経が用いられており、我々も無事に研修を終える感謝の気持ちを持って唱えさせて頂いた。静まった境内に響く経文に神々しさを感じた。

(博士後期3年 櫻井 宣明)



左：東照宮周辺での
集合写真

右：皆でおにぎりを
頬張る

～ コラム「仏教人物列伝」⑤ ～

ゴータマ・ブッダ その五

⑤降魔（つづき）と⑥成道

前は苦行とその放棄を中心に見ました。今回は前回の予告通り、降魔と成道についてになります。

菩薩が成道の前にマーラ（魔羅、魔、悪魔）の誘惑を退けたことはみなさんご存じのことと思います。これを「降魔」（魔を降伏すること）と呼ぶのですが、では「マーラ」とは何者でしょうか？よくキリスト教のサタンと比較されますが、神に反抗し、墮天使として地獄を住処とするのでしょうか。また、降魔と成道の関係はどのようなものなのでしょうか。

マーラは「死ぬ」「殺す」を意味する動詞から作られた言葉で、本来「死」を意味しています。仏教において死の対局は、「覚り」＝「涅槃」です。覚り・涅槃は死を超越した境地です。ですから覚り・涅槃を妨げるものはみなすべて何らかの形でマーラと関連付けられます。そこでマーラは、種々の煩惱や五取蘊と同一視されます。それゆえマーラは本来、死、煩惱、五取蘊といった抽象概念が擬人化されて聖典中に表現されたものであると理解することもできそうです。そして擬人化されたマーラは、天界に位置を占め、色界の梵天よりも下ですが、帝釈天に代表される欲界の神々の中で最上位に位置づけられ、一般的には第六欲天である他化自在天と同一視されています。マーラのこれらの様々な存在容態は後世、死魔・煩惱魔・蘊魔・天魔の「四魔」（乃至は「行魔」を加えて五魔）に分類されました。

さて降魔と成道の関係についてですが、これには大きく分けて2つの見方があります。ひとつは降魔がすなわち成道であるとする見方（降魔＝成道）と、もうひとつは降魔の後に禪定などを経て成道するという見方（降魔⇒成道）です。前者に従う伝では、菩提樹下で禪定に入っている菩薩にマーラとその軍勢が数々の妨害を企て、これに対処する形で菩薩が次々と種々の神通・智慧を発揮していき、最後に自身の煩惱が尽きたことを知る智慧（漏尽智）を得て成道すると、そこではじめてマーラが負けを認めて意気消沈します。後者に従う記事では次のようになります。菩提樹下に坐っている菩薩のところにマーラとその軍勢が押し寄せて種々の攻撃を加えますが、菩薩には何の効き目もありません。しまいには菩薩をその座からなんとか起たせようとして、マーラは「その座は俺のものだ」などと難癖をつけます。しかし地の女神が現れて菩薩の前生における偉業を証して、マーラが負けると、菩薩が禪定に入ります。初禪→第二禪→第三禪→第四禪という次第で禪定を深めて行き（高めて行き）、第四禪を経ると、過去世を想起する智慧（しゆくじゅうずいねんち宿住随念智）、衆生の生死輪廻の様をまざまざと知る智慧（ししょうち死生智）を獲得します。さらに縁起の考察、あるいは四諦（苦・苦の原因・苦の滅び・苦の滅びにいたる道）の観察によって漏尽智を得て成道します。

以上は後世の伝に見られる記述であり、初期仏教聖典にはこのような記述はありません。しかしながら、異論はあるでしょうが、筆者は降魔⇒成道の見方に初期仏教聖典の記述との整合性を認めています。初期仏教聖典では、初禪に入る前に、「五蓋」としてくくられる5つの煩惱（①貪り、②いかり、③心が沈み込み体が重い状態、④心のうわつきと悩み、⑤疑い）が遮断されなければならないことが説かれているので、降魔⇒成道の次第ならば、この五蓋がマーラ（煩惱魔）として具象化されていると理解されるからです。また初禪乃至第四禪は色界に属するので、欲界の最上位の神が、菩薩が初禪に入る前に負けを認めるのも無理はありません。

マーラについて付言しておきますと、初期仏教聖典では、面白いことに、覚者となった釈尊の前にも、般涅槃（死ぬこと）の直前まで、たびたびマーラが現れて、釈尊を悩ませようとしています。父親を打ち負かされたマーラの3人の娘が誘惑を試みるのも、覚った後の釈尊に対してです（後世の伝では成道前の時点に移されていることが多い）。このようにマーラは成道の時に完全に負けて後は一度も現れないというわけではありません。先の四魔の分類で申しますと、煩惱魔と天魔は成道時に降伏されましたが、あとの死魔と蘊魔は、般涅槃時に降伏されるのです。般涅槃時のマーラの登場については⑧入滅のところで触れます。

岩井昌悟（東洋大学仏教会事務局長）

～ コラム「日本文化と仏教」⑤ ～ 能「江口」にみる遊女の往生

室町時代は、それ以前の思想や価値観が取捨選択され、現代につながる文化が確立した時代である。なかでも能楽と謡曲はそれをもつとも如実にあらわすものであり、そこに描かれる仏教思想は実に多種多様である。現存する謡曲二百番のうち、仏教思想がみられないものはわずか三十九番にすぎず、あとはなんらかのかたちで仏教要素がふくまれているという。（『能楽全書』第一巻・姉崎正治「謡曲に於ける佛教要素」）たとえば、源平の戦乱によって修羅道に堕ちて苦しむ戦没武者が救われる<修羅得脱>がテーマの曲は「頼政」「生田敦盛」「巴」「知章」などがあり、「大原御幸」は『平家物語』灌頂巻「六道語」に材をとり、平家滅亡後、生き残った建礼門院（平徳子）が後白河法王に自分は生きながら六道を体験したと語る。殺生や邪淫の科で地獄に堕ちた者が道心者の誦経回向で救われるというのがテーマのものには「阿漕」「女郎花」「戀重荷」などがある。

なかでも『法華経』は平安時代以降、その読誦が重要な信仰行事になっており、読誦を聞くだけで功德が

得られるありがたい御法と信じられていた。それはそのまま室町時代にいたっても、妄執に苦しんでこの世をさまよう亡霊すら、その誦経を聞けば解脱できると考えられた。たとえば、藤原定家の式子内親王への恋慕の妄執が葛藤になって内親王の墓にまわりつき、その霊を苦しめる「定家」には、以下の一節がある。

只今読誦し給ふは菓草喩品よなう。なかなかなれや、此妙典に漏るる草木のあらざれば、執心のかづらを掛けはなれて、佛道ならせ給ふべし。

また、<草木国土悉皆成仏>を主題とする曲には「杜若」「西行櫻」「佛原」「殺生石」「六浦」「芭蕉」「半葩」「藤」などがあり、たとえば和歌にも、

「もろともに一味の雨のふりぬれば草木もひとほとけとぞなる」

と詠われて、もつとも好まれるテーマの一つである。

その他、法華経に直接関係がある曲は「兼平」「鶴」「梅枝」「海土」「夕顔」など二十曲にのぼり、阿弥陀信仰、称名念仏がテーマの「実盛」「清経」「遊行柳」などの十三曲とともにもつとも多い。

また経中の諸菩薩に対する渴仰も数多くとりあげられ、観世音菩薩や普賢菩薩は現世の苦しみに迷いあえぐ人々を救済するために姿を現す存在として描かれる。紹介する「江口」はその代表曲である。作者は今春禅竹とも世阿弥ともされるが、もともとは世阿弥の父・観阿弥清次の作であったことが世阿弥の著書からわかる。「浮世は仮の宿」が主題であり、それを象徴するために江口の遊女を主人公にする。

江口は大阪の淀川と三国川(現在の神崎川)が分かれる水上交通の要所で、江口の君とよばれる遊女が大勢いて繁栄していた。彼女たちは春をひさぐだけでなく、西行と歌を詠み交わすほどの教養豊かな芸能人で、なかには貴族の妻妾になる遊女もいた。つまり、もつとも華やかで世間の注目を集める存在だったのだが、しかしそれと同時に、もつともはかない境遇に生きる女たちでもあったのである。

たとえそういうそういう川に浮んで流れに身をまかせて漂う笹葉のごとき女の身であっても、ひとたび愛執の迷い苦しみから逃れ脱しさえすれば、歌舞音曲の菩薩となり得る。『十訓抄』『古事談』には性空上人が普賢菩薩に化現した遊女を見たという逸話があり、『選集抄』にも同様のエピソードがあることから、後世、白象に乗る遊女の姿が普賢菩薩の図とされるようになった。この曲はその逸話に基づき、江口の里にたどりついた旅の僧の前に遊女の亡霊が現れて昔のいきさつを語り、化現のありさまを見せるストーリーである。

「江口」 (第二場)

野上豊一郎『註解謡曲全集』中央公論社 より抜粋

地謡／それ十二因縁の流転は、車の庭を廻るが如く、鳥の林に遊ぶに似たり。前^{ぜんじょう}生^{しょうじょう}また前生、かつて生^{しょうじょう}生

の前^{さき}を知らず。来世^{きせ}なお来世、更に世世^{せせ}の終りをわきまふる事なし。

シテ「或ひは人^{にんじゆう}中天上の善果を受くるといへども、」

地謡／顛倒迷妄^{てんどうめいもう}して未だ解脱の種を植ゑず。

シテ「或ひは三途八難の悪趣^{あくしゆ}に墜^だして、」

地謡／苦患^{くげん}に遮^{さえ}られて既に発心^{ほつしん}のなかだちを失ふ。

シテ「然るにわれ等、たまたま受け難き人身^{にんじん}を受けたりといへども、罪業深き身と生まれ、殊^{こと}にためし少なき河竹の流れの女となる。前^{さき}の世の報いまで思ひやるこそ悲しけれ。」

——中略——

シテ「ある時は色に染み貪^{どんじやく}著^{ちやく}の思ひ浅からず。」

地謡／又ある時は聲^{こゑ}を聞き愛執の心いと深き心に思ひ口に^{もうぜつ}いふ妄舌の縁となるものを。げにや皆人^{ろくじん}は六塵の

境^{きやう}に迷ひ六根^{ろくこん}の罪を作る事も、見る事聞く事に迷ふ心なるべし。

——序の舞——

シテ「^{じつそうむろう}実相無漏の^{だいかい}大海に、五塵六欲の風は、吹かねども、」

地謡／^{ずいせんしんによ}随縁真如の波の、立たぬ日もなし立たぬ日もなし。

シテ「^{たちい}波の^{なにゆえ}立居も何故ぞ。^{かり}仮なる宿に心とむる故。」

地謡／心とめずは浮世もあらじ。

シテ「人をも慕はじ。」

シテ「別れ路も嵐吹く、」

地謡／花よ紅葉よ月雪のふることもあらよしなや。

シテ「思へば仮の宿、」

地謡／思へば仮の宿に、心とむなと人をだに諫めしわれなり。これまでなりや帰るとて、即ち普賢菩薩と現はれ、^{びやくぞう}舟は白象となりつつ、光とともに白妙の白雲にうち乗りて、西の空に行きたもふ。ありがたくぞ覚えたる、ありがたくこそ覚ゆれ。

(大学院仏教学専攻 永田道子)

～ 書籍・イベント紹介 ～

《書籍》

・『図解・曼荼羅の見方 カラー版』

小峰彌彦/著

曼荼羅の基礎知識から曼荼羅の見方、曼荼羅を構成する各院・各会の数多くの仏たちを平易に解説。あわせて密教の重要な思想「菩提心」「即身成仏」などもわかりやすく紹介。

(大法輪閣 2100円)

・『なぜいま「仏教」なのか 現代仏教のゆくえ』

奈良康明/著

自力 vs 他力という構図で対立的に語られがちな禅と念仏の立場から、現代の現実的な視点に立ち、それぞれの仏教信仰のあり方を探り、現代社会における仏教の意義を議論する。

(春秋社 1890円)

・『戒律と倫理』

日本佛教学会/編

仏教教団にあって戒律とは何か、戒律をどのように捉えれば機能させることができるのか、仏教の立場から社会に対して有効な倫理的発言ができるとすればその根拠として必要なのは何なのかといった現代における仏教の存在意義までを考察する。

(平楽寺書店 10500円)

・『原始仏教入門 釈尊の生涯と思想から』

水野弘元/著

原始仏教とは何かを分かりやすく説いた仏教入門書。最古の仏典をひもとき、人間釈尊の生々しい姿とその思想に迫る。

(佼成出版社 1890円)

・『日本ひらがな仏教史 仏と人の心がわかる』

大角修/著

供養・戒名は必要か?浄土はあるのか?宗祖の言葉はなぜ正しいのか?曼荼羅の心とは何か?日本人の生活感・行事・習俗から捉え直した仏教のリアルと歴史。

(角川書店 1260円)

・『神と仏の出逢う国』

鎌田東二/著

山川草木、花鳥風月、森羅万象に祈りを捧げる日本人の神仏観。日本文化の底流を成す神仏習合の歴史を見直し、社会不安に満ちている現代で平和に向かい何ができるか、新たな日本的霊性を見出し、その可能性を考える。

(角川学芸出版 1575円)

・『龍樹と語れ! 『方便心論』の言語戦略』

石飛道子/著

論法のエッセンスを凝縮した『方便心論』を解説し、龍樹の「驚異の言語論」をよみがえらせる。

(大法輪閣 2415円)

・『宗教聖典を乱読する』

釈徹宗/著

ヒンドゥー教、神道、ユダヤ教、キリスト教、イスラーム、仏教の聖典を題材に乱読し、宗教の真髓を説く。(朝日新聞出版 1785円)

・『新版 明治の禅匠』

(禅文化研究所 2625円)

《イベント》 ～ 秋から冬にかけて行われる仏教イベントです。～

・第6回 21世紀高野山医療フォーラム

「今求められる学びと実践」

21世紀高野山医療フォーラム(理事長:柳田邦男)は、医療の中で果たすべき宗教の役割として『広く人間に与えられた苦痛・苦悩からの解放』という困難な問題に真摯に取り組み、日本各地で年に1~2回、21世紀高野山医療フォーラムを開催しております。第6回目を迎えます今回は、「今求められる学びと実践」をテーマに各方面でご活躍の講師を高野山にお招きします。

日時:平成21年11月21日(土)~11月22日(日)

会場:高野山大学 松下講堂黎明館 和歌山県伊都郡高野町

お問い合わせ:21世紀高野山医療フォーラム事務局
03-6808-7221

詳細は、高野山東京事務所ホームページ

<http://www.koyasan.jp> をご覧下さい。

・日蓮と法華の名宝

文応元年(1260)、39歳の日蓮は、度重なる災難と国家の危機を憂えて、『立正安国論』を著し、鎌倉幕府前執権の北条時頼に献じます。平成21年

(2009)は、それから750年の節目の年にあたります。本展覧会はそれを記念し、『立正安国論』を軸に、京都十六本山を中心とした諸寺伝来の多くの宝物を一堂に展覧します。鎌倉新仏教の一翼を担った

禅文化研究所編集部/編

幕末から明治維新、そして廃仏毀釈の激動の時代に、命がけで禅の法灯を繋いでこられた宗匠方の記録。待望の復刻新版。

・『マンガで読み解く「仏教」のはじまり』

とみ新蔵/著

仏教の成立と教えをわかりやすくマンガで説明。

(PHP研究所 1260円)

日蓮の足跡をたどり、その門下の活躍、特に孫弟子にあたる日像の京都布教開始以降、公家文化と並ぶ町衆文化の形成に果たした日蓮諸宗の大きな役割を紹介します。狩野元信や長谷川等伯、本阿弥光悦、俵屋宗達、尾形光琳、尾形乾山、こうした近世日本美術の潮流を築いた京都の芸術家たちが、皆、法華の信者だったことは驚くべきことではないでしょうか。かれら名家の優品を通じて、日蓮諸宗と法華経信仰に支えられた京都町衆文化の奥の深さを再認識していただければと思います。

日時:平成21年10月10日~11月23日

会場:京都国立博物館

休催日:月曜日(ただし10月12日は開館、10月13日[火]休館)

料金:一般1,300円、大・高生900円、中・小生400円

お問い合わせ:075-541-1151

ホームページ:<http://www.kyohaku.go.jp/>

・(財)国際仏教興隆協会文化講座

連続シンポジウム インドはどこへ行くのか第5回

インドは、どこから来たのか

ーインドの血と混淆文化の成り立ちー

インドの亜大陸はユーラシアの一部でありながら

北の高山、西の砂漠、東の熱帯雨林、南半は海洋にへだてられて地勢的に孤立し、それ自体でひとつの完結した世界だったように見える。しかし、先史のアーリヤ侵入以来、グレコ・ローマやイラン系騎馬民族、アフガン・テュルク、モンゴル系イスラーム勢力、ポルトガル・イギリスほかのヨーロッパ勢力など、いくたびか大波のように流入した異文明・異文化を受けて独特の世界へと熟成した。インドから流出して他世界に強く影響したものは、西への香辛料、そして東への仏教だった。この仏教を軸に古代インドの異文化交流を跡づけてみる。

講師：山田明爾先生（龍谷大学名誉教授・仏教文化研究）

日時：平成21年11月18日（水） 18:00～20:00（受付開始 17:30）

会場：東京・青山文化村 東京都港区南青山 2-26-38
東京メトロ銀座線「外苑前」駅 1A 出口を出て、

直進、「サブウェイ」の角を左折。駅から徒歩 1分

入場：無料 ※事前にお申込みが必要となります

問い合わせ：03-3711-7608

・前進座特別講演「法然と親鸞」

法然上人800回忌、親鸞聖人750回忌記念

主演：中村梅之助・嵐圭史

後援：浄土宗、浄土真宗本願寺派、真宗大谷派、財団法人仏教伝道協会

共催：読売新聞

日時：11月15日（日）～12月15日（火）

会場：青山劇場（渋谷）

問い合わせ：0422-49-2811（前進座東京営業所）

～ 東洋大学仏教青年会・仏教会、今後の予定 ～

※勉強会についてのお問い合わせは下記の連絡先をお願いいたします。（会員は無料です。）

《定例全体研究会》

【内容】定例全体研究会では、毎回、仏教青年会・仏教会からの報告を行います。これに加え、渡辺章悟仏教会会長の講義「大智度論を読む」を開催します。時々外部から特別講師を呼んで、いろいろな話しをしてもらいます。参加希望者は岩井まで（tba.bussei@gmail.com）。

※講義資料は配布します。

【次回予定】

第5回 10月28日（水）14時40分～16時10分、文学部会議室（白山第1キャンパス6号館4階東南側）

第6回 11月25日（水）14時40分～16時10分、文学部会議室（白山第1キャンパス6号館4階東南側）

《語学勉強会》

※日程・場所については要確認。いずれの講座も初級者の参加が可能です。

○サンスクリット語読書会

「初等文法を兼ねたインドの宗教文献の読書会」

講師：出野尚紀

日時：隔週水曜日 13:00～14:30

内容：インドの説話文学の講読。初級者も参加可

能。

1. バリバリコース（大学院進学を考えているような学生向け）
2. チャレンジコース（Skt.文を読みたいという学生向け）
3. オブザーブコース（インド文化に触れたいイン哲

の学生以外の方向け)

※1～2はそれぞれの予習が必要ですが、3は予習
など不必要です。 ※講義資料は配布します。

次回勉強会

日時：10月7日(水)13時～14時30分

場所：未定

講師：出野尚紀

○チベット語仏典読書会

「ツォンカパのラムリム・チェンモを読む」

講師：石川美恵

日時：隔週土曜日18:30～20:00

内容：初等文法を兼ねたチベット語仏教文献の講
読。初級者も参加可能。 ※講義資料は配布します。

次回勉強会

日時：10月7日(水)13時～14時30分

場所：インド哲学科共同研究室(6号館4階)

講師：石川美恵

○漢文仏典講読会

「仏教漢文初歩—『観音経』を読む—」

講師：橘川智昭

日時：隔週木曜日16:20～17:50

開始日：4月16日(木)

内容：特に仏教漢文の入門者を対象として、古来

場所：5101教室(白山校舎5号館)

講師：橘川智昭

日本で親しまれてきた経典をとりあげます。また
経文を通じて仏教思想の基礎を学びます。

※時間・場所については要確認。

※講義資料は配布します。

次回勉強会

日時：10月15日(水)16時20分～17時50分

《各種研修》

※参加希望の方は必ずご連絡下さい。

「山口先生と行く上野美術館探訪」

【期日】2009年11月8日(日)10:00～15:30

【集合場所】午前10時に上野駅公園口改札

【見学場所】上野の森美術館

「聖地チベット—ポタラ宮と天空の至宝」展

東京国立博物館の東洋美術(平常展)

※参加費として、美術館・博物館の入場料が必要
です。

※定例全体研究会、各種研究会とも東洋大学白山第
1キャンパス6号館4階のインド哲学科研究室前
の掲示板の案内もご確認ください。

※その他の希望がありましたらご相談下さい。(問
い合わせ)

※紹介したい行事や掲載したい記事などがございましたら、以下のアドレスまでご一報下さい。

※現在新入会員を募集しています。入会希望者は以下までご連絡下さい。

※会員規約や活動内容などの詳細はホームページ(<http://www.toyo-yimba.org>)をご覧ください。

編集責任者：文学部インド哲学科2年 藤井明(東洋大学仏教青年会広報)

編集協力：文学部インド哲学科2年 高木俊次

東洋大学仏教会

卒業生、一般：年会費3000円、特別賛助一口5000円

東洋大学仏教会事務局長 岩井昌悟

〒112-8606 東京都文京区白山5-28-20

東洋大学インド哲学科第8研究室気付

東洋大学仏教青年会

学生：年会費1000円

東洋大学仏教青年会会長 板野義弘

nyorol@hotmail.com

2009年10月7日

まいとりの No.6

Tel: 03-3945-7393(-7357) E-mail: tba.bussei@gmail.com URL: <http://www.toyo-ymba.org>